

ミャンマーの都城遺跡

辰 己 眞知子*

I. はじめに

ミャンマーは中国とインドという二大文明圏の十字路に位置し、多民族国家としてその歴史、文化を育んできた。古代から近代にかけて多くの都市遺跡があるが、パガン（現在名バガン）やマンダレー（コンバウン王朝の首都）以外はあまり知られていない。筆者は1998年にミャンマーを訪問し、ビルマ族、モン族、ピュー族、シャン族などの歴史や文化に興味をもち、いくつかの場で発表した¹⁾。小稿では、古代から中世の王朝を築いたピューとパガンについて、数点の資料を紹介したい。ミャンマーは現在軍事政権下にあるため、地形図の入手は困難である。また、詳細な文献も限られている。19世紀以前の古地図には、北部はアヴァ（インワ）、南部がペグー（バゴー）として記されている²⁾。地形図は、戦前のイギリスが測量し、日本が編集した図を用いた。

II. ミャンマーの王朝史

ミャンマーは、主要9民族の他に135民族を有する多民族国家である³⁾。7割近くを占めるビルマ族が移住してきたのは8世紀で、

それより前にモン族（モン＝クメール系）やピュー族（チベット＝ビルマ系）、シャン族（タイ系）が住んでいた（第1表）。10世紀以前の歴史については確実な史料に乏しく、詳しいことはわかっていない。モン族の王国はパーリ語史書や仏教史書、モン語の碑文の記載から、ピューについてはビルマ語年代記、モン語碑文や中国の漢文史料の記載から、その存在が知られている。ビルマの王朝を簡単にまとめたものが第2表である。

1886年にイギリスの植民地になるまでのミャンマーには、いくつかの王朝があった。かつてピューの国家が栄えていたことや、ピュー族とならんで、モン族の国があったこと、ビルマ族最初の王朝がパガン朝であったこと、シャン族の王朝があったことなどがわかる。

表中のハンターワディー＝ペグー王朝はシャン族の王が建国したが、実態はモン族の王朝であった。さらに、第一次シャン王朝もシャン族の王が建国したが、実質的にはビルマ王朝であった。ビルマにおけるシャン族は、自ら、「ビルマ化」し、あるいは「モン化」していったのである⁴⁾。

III. ピューの都市遺跡

(1) ピューの国家とその文化

考古学的な資料を中心に判断すれば、ピ

* 京都精華女子中学高等学校・非常勤講師

第1表 ミャンマーの主要民族

移住順	民族名	特 徴	おもな分布地域
第一派 モン=クメール系	モン	上座部仏教、水田耕作、ビルマ族と同化。かつてタトンやベグーに王国を建設。 「スワンナブーミ*」伝説	モン州・チャイカミー・ エーヤワディーデルタ
	パラウン	茶の生産に従事	シャン高原西北部
	ワ	「生蕃」ワ族土着の精霊信仰。 1930年まで首狩りの風習があった。 「熟蕃」ワ族は仏教徒。	シャン高原東北部 サルウィン川東側から雲南
第二派 チベット=ビルマ系 (シャン族はタイ系)	チン	焼畑耕作を含む畑作、漁業、狩猟。 一部はキリスト教、仏教を信仰しているが、 大部分は精霊信仰。	チン州 バトカイ山脈のチン丘陵からヤカイン (アラカン) 山脈
	カチン	自称ジンポー。ビルマ族と異なり苗字がある。 焼畑耕作を含む畑作農業が中心。一部水田耕作もみられる。 宗教は祖霊と精霊への信仰。 近年、キリスト教も普及。	カチン州 シャン州北部
	ビュー	古代民族。モン語では「ティルチュル」。 唐代史料では「驃」。 ペイダノーやタイエーケッタヤー(シュリク シュトラ)を建設。	
	アラカン	上座部仏教、稲作	ヤカイン州
	ナガ	大きな民族集団としては「裸ナガ族」(コニ ャック族)。	バトカイ山脈からインドのナガ丘 陵、ザガイン管区北辺
	カレン	平地のカレン族の85%は仏教徒、15%はキリ スト教徒。おもに水田耕作。 山地のカレン族は精霊信仰。赤系統の服が多 い。上半身袖なしの貫頭衣を着用。	下ビルマ、エーヤワディーデルタ、 シッター川流域、 マルタバン地方、 ダニンダーイ地方、カイン州
	ジャン	北タイ族の系統。上座部仏教を信仰。 焼畑耕作、灌漑耕作。 バガン朝滅亡後王朝を建てる。 ジャン文化圏を形成(ジャン語、ジャンパッ ク)。 男子は幅広いズボンを着用。	シャン高原 シャン州
第三派 チベット=ビルマ系	ビルマ	上座部仏教を信仰。稲作。 内陸部は畑作。 男女ともに下半身はロンヂー、 上半身はエンヂーを着用。	マンダレー管区 マグエー管区 ザガイン管区に9割以上

*シュエタゴン・バゴダのモン語碑文に記されている国

籾 司郎「民族と言語」、(綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいミャンマー 第2版』、弘文堂、1994、所収)、73
~90頁。

大野 徹「ミャンマーの民族」、(『地球の歩き方30ミャンマー』、ダイヤモンド・ビッグ社、1998、所収)、176~177頁。
より作成

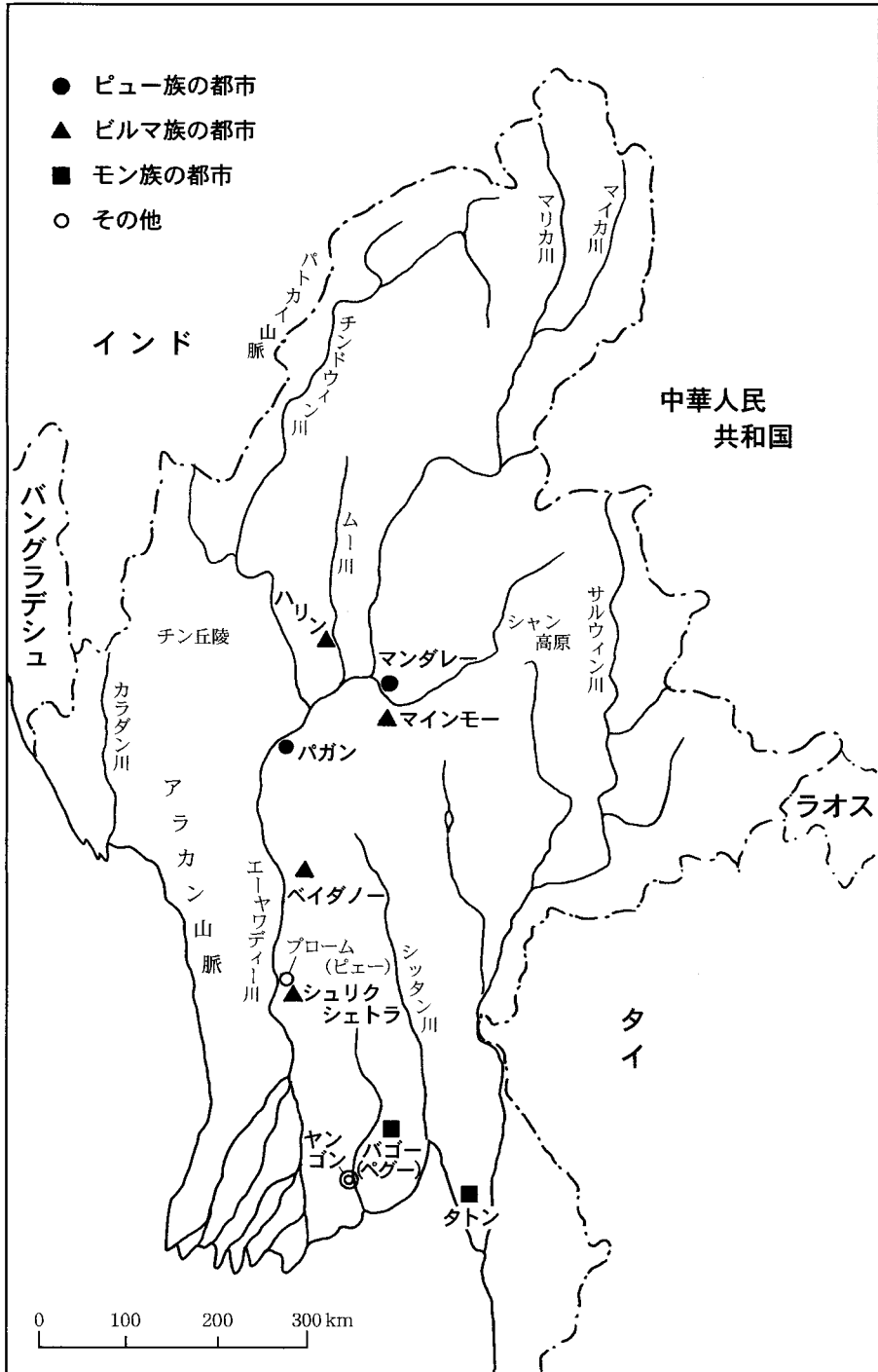
第2表 ビルマ王朝略史

年 代	事 柄
紀元前3世紀	アショーカ王がスワンナブーミ「金地国」に僧侶を派遣
6世紀	モン人の王国ラーマンニャデーサ（タトン）やハンサヴァティ（ペグー郊外）があったとされる
	ビューの都市（ベイダノー、ハリン、タイエーケッタヤー）栄える
802	ビューの使節団が唐を訪問する
832	ビューが南詔の攻撃を受ける
833	南詔国によりビュー国滅亡
874	パガンに王都建設される
1044	ビルマ人初の王朝パガン朝成立
1057	アノーヤタ王がタトンを征服。ビルマ族、モン文化、上座部仏教を受容 パゴダや寺院が建造される
1287	元軍によりパガン朝滅亡 ハンターワディー＝ペグー王朝成立（～1539）
1312	第一次シャン王朝成立
1526	第二次シャン王朝成立（～1555）
1531	タウンゲー王朝おこる（～1752）
1569	タウンゲー第2代バインナウン王がアユタヤを占領（～1584）
1752	コンバウン（アラウンバヤー）王朝おこる（～1885）
1757	アラウンバヤー王、ペグーを陥れ、モン族を征服
1767	3代シンビューシン王、アユタヤ朝を滅ぼす
1785	コンバウン朝、アラカン国を征服
1857	10代ミンドン王によりコンバウン朝最後の首都としてマンダレーが建設される
1886	イギリスへ併合される

石井米雄・桜井由躬雄編『東南アジア世界の形成』、大野 徹『地球の歩き方ミャンマー』より作成

ビュー族がビルマでもっとも早くに国家を形成したと思われる。ビュー王国は中国の古文獻に「驃」、「勑」、「漂越」などの文字で記録されてきた。遺跡として、エーヤワディー川沿いの町プロームの北東約8kmにあるタイエーケッタヤー（サンスクリット名シュリクシェトラ）、プロームの北方タウンドンジー近郊にあるベイダノー、マンダレー北方のハリン、マンダレー南方のマインモーなどが知られている。シュリクシェトラは4～9世紀、ハリンが2～9世紀、ベイダノーが1～5世紀、マインモーはさらに古い遺跡である（第1図）。なかでも、最も早くから調査され、

多くの遺物が発掘されているタイエーケッタヤーは、東南アジア屈指の都市国家として栄え、その時の様子は、ビルマ語年代記やモン語碑文、漢文史料に記載されている。たとえば、玄奘（602～664）の『大唐西域記』には、サマタタ国（現在のバングラデシュ）に関する記述の中で、東方の諸国の一つとしてタイエーケッタヤー（以下シュリクシェトラ）のことを「室利差咀羅」として簡単に紹介している。また、義浄（635～713）の『南海寄帰内法伝』では、「室利察咀羅」として紹介し、そこでは上座部、大衆部、根本説一切有部、正量部などの部派仏教が信仰されていたこと



第1図 ミャンマーの古代都市

に触れている⁵⁾。

中国の人々には、ピュー族は「驃」として知られており、『新唐書』の南蛮伝の驃国の条には、次のように記録が残されている。

驃国はむかしの朱波国で、自ら突羅朱といい、ジャワ人には徒里拙とよばれた。その位置は今の雲南省永昌の南2,000里にあり、都の長安からは14,000里の所にあった。その領域は東は陸真臘（ラオス）、西は東天竺（アッサム）、北は南詔に接し、属国18を領有していた。王城の周囲が160里あり、レンガ造りの濠で囲まれ、12の城門がある。100を越える寺院があり、屋根が輝くいらかで葺かれている⁶⁾。

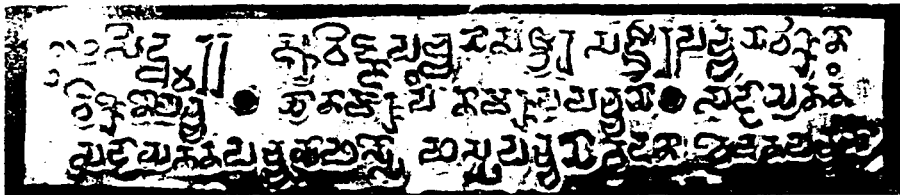
また、860年頃成立したとされる『蛮書』には、832年に南詔が「驃」を侵略し、捕虜3,000人を昆明に強制移住させたことを伝えている⁷⁾。翌年ピュー国は滅亡した。

発掘の成果から多くのことが判明している。ピューは独自の文化を持っていた。彼らが使用したピュー文字（第2図）は、3世紀頃南インドから移住してきたヒンドゥー教徒から伝えられたものである。また、シュリクシェトラとペイダノーから出土した大型の石製骨壺を整然と配置する墓地や、細かな文様のある土製のパイプなどは、ピュー独自の伝統と考えられる。一方で仏教の信仰やコインの使

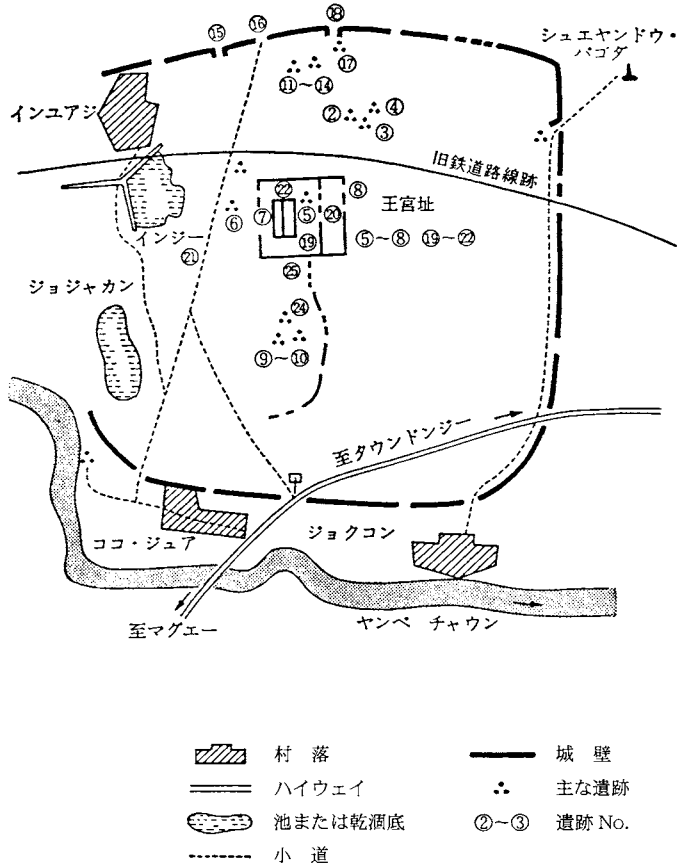
用などに、インドの強い影響が認められる。

(2) ペイダノー

ペイダノー（ビシュヌの町の意）は、イン川流域の標高103~104 mのところ立地し、年間降水量が1,000 mmに満たない乾燥地域に位置しているため、城壁の内外にため池が存在し、サボテンがたくさん生え、一面が畑になっている。遺跡が乾燥地域に立地しているのは、ペイダノーの位置がビルマ東北部とインドとの交易の中継地点であったからだといわれている⁸⁾。また長澤は、考古学者ウー・アウン・トウの『ペイダノーの発掘報告』（1968年）をもとに詳細な報告をしている⁹⁾。小さい丘のように見える城壁は、ほぼ四角形をなしている。西側の壁がはっきりしないのは、ヤンペチャウン川によって増水期に押し流されたものと思われる。東側は約3.0 km、北側に約2.7 km、南側約2.4 kmの城壁が残っている（第3図）。王宮北方の図中の番号②、③、④は、僧院とパゴダの跡で、とくに②は多くの小室が並び、インドのナランダ遺跡に似ている。④は三重の丸い煉瓦周壁からなる遺跡で仏塔の跡であろう。番号⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫は、王宮址とその外壁の発掘地点である。とくに⑤、⑥、⑦は、ナンドウとよばれる王宮址で、煉瓦の基礎が荒れ果てた状態で残っている。北門近



第2図 ピュー文字
シュリクシェトラ出土 (Aung Thaw, 1972による)



第3図 ベイダノー平面図(長澤、1975による)

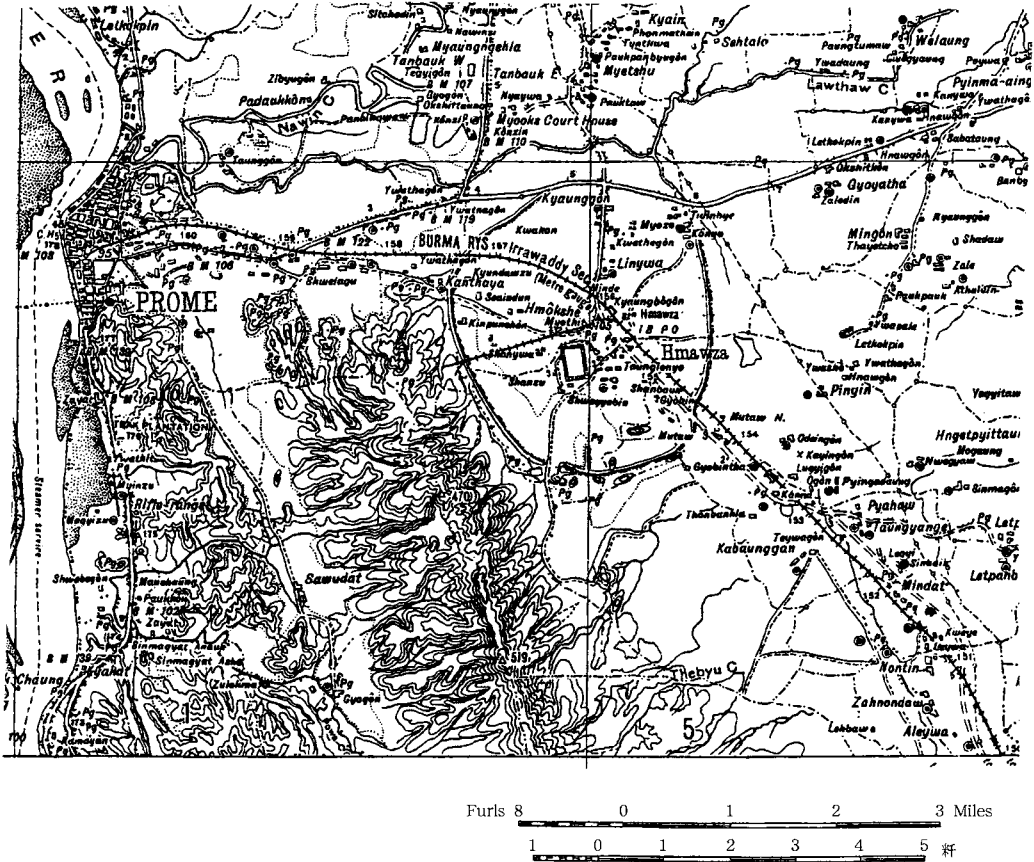
くの①①、①②、①④は、寺院の跡とみられ、多数の骨壺や埋葬遺骨が発見された。とくに①②は、他の建物と異なる正方形に矩形の別室がついた平面を持ち、周囲から80個に及ぶ骨壺が出土した。①④からは伸展葬の人骨一体と、人骨二体、骨壺が同時出土していることから、再葬の慣行があったようだ。中央に円筒状の遺構があり、中央アジア各地に見られる小寺院と同様な構造であったことを推測させる。番号①⑤、①⑧は城門の遺構で、外側を美しいカーブで構築するのがピュー王国の城門の特色である。

このように多くの遺構はあっても、仏像な

どの宗教的な遺物やピュー文字を記したものは発見されていない。ベイダノー出土のコインは文様が簡単なので、ハリンやシュリクシエトラよりも時期が古いと考える根拠のひとつとされている。

(3) シュリクシエトラ

一方、新しいピューの遺跡はシュリクシエトラ(吉祥の国の意)で、南北4.4 km、東西3.5 kmに及ぶほぼ円形に近い城壁跡が残っている(第4図)。1907年から断続的な発掘が進められてきたが、1964年以後は集中的な調査が続けられている¹⁰⁾。プロームはピューとも呼ばれ、エーヤワディー川下流左岸



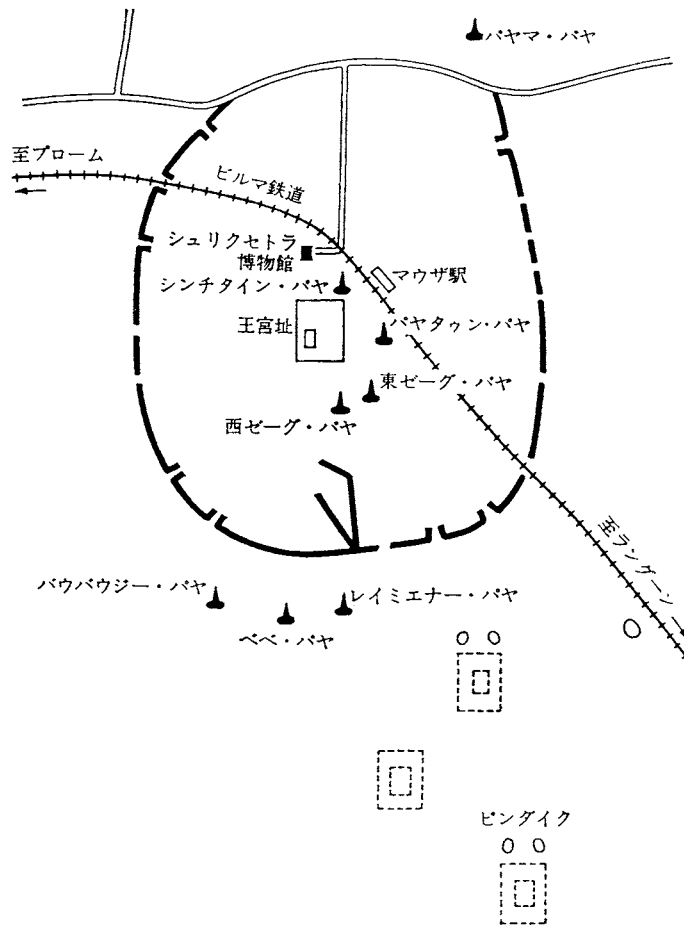
第4図 シュリクシェトラ周辺の地形図(1942) 50000分の1
イギリスによる測量をもとに日本軍が編集したもの(世界分布図センター・岐阜県情報工房所蔵)

にある河港で、ヤンゴンの北北西240 kmに位置している。絹織物や漆器を産し、砂金の採集が行われ、商業の中心地となっている。王宮はプロムから北東約8 kmの標高120 mの平野にある。この平野は、エーヤワディー川へ向かって流れ込む支流が形成したものである。都城の面積は1,420 haに達する。鉄道が中央部を斜めに走っており、中ほどにマウザ駅がある。駅と向かい合って、王宮址とされる遺構があり、囲壁と濠をめぐるし、その輪郭は南北600 m、東西300 mの長方形である。王宮は、都城の南北軸上に位置して

はいるが、その中央ではなく、やや南に寄っている。ここに他の東南アジアで一般的に見られる東向きとは異なる、南向きの構えを強調した造営手法が認められる。また、多くの都城が長方形か正方形の輪郭を有しているのに、円形の輪郭を有するというシュリクシェトラの特徴が見出せる。都城の造営者は円を志向していたと思われるが岡は指摘している¹¹⁾が、その理由についてはさらに検討しなければならない。城壁には32の大きな城門と同数の小さな城門を擁し、ベイダノーと同じく入口はカーブしている。この32という数

は、東南アジアでしばしば登場する数である。32に王宮を加えてできる33という数は、メール山の頂上にある第二の極楽スダルサーナに住む33柱の神たちを想起させる。当時のピュー王国全体が、33神の住む極楽の模造として造られた¹²⁾。王宮全体の北部は、低平な水田地帯になっている。遺跡が多いのは南部で、ストゥーパや寺院が残っている（第5図）。城壁の南にバウバウジー、北にパヤマが配置されている。パヤマは円すい形のパヤで焼成煉瓦によって建築されている。この形状はインドやスリランカの祖形につながり、またパ

ガンの古いストゥーパとされるローカンナンダやブッパヤーへと続くものである¹³⁾。ここからは大乘系の菩薩像、ホラ貝を持ったバラモン系の像、シバとラクシャを刻んだ巨大な石像、バルマン王塔や五仏などの像も出土した。また、周辺で発見された骨壺には、スールヤヴィクラマ、ハリヴィクラマ、シハーヴィクラマなどの名が見え、7世紀～8世紀にかけてシュリクシェトラは、ヴィクラマの王朝名を負う王によって支配されていたらしい。さらに、多くの誓願板やピューコイン、装身具なども出土している。これらはマウザ駅近



第5図 シュリクシェトラ平面図（長澤、1975による）

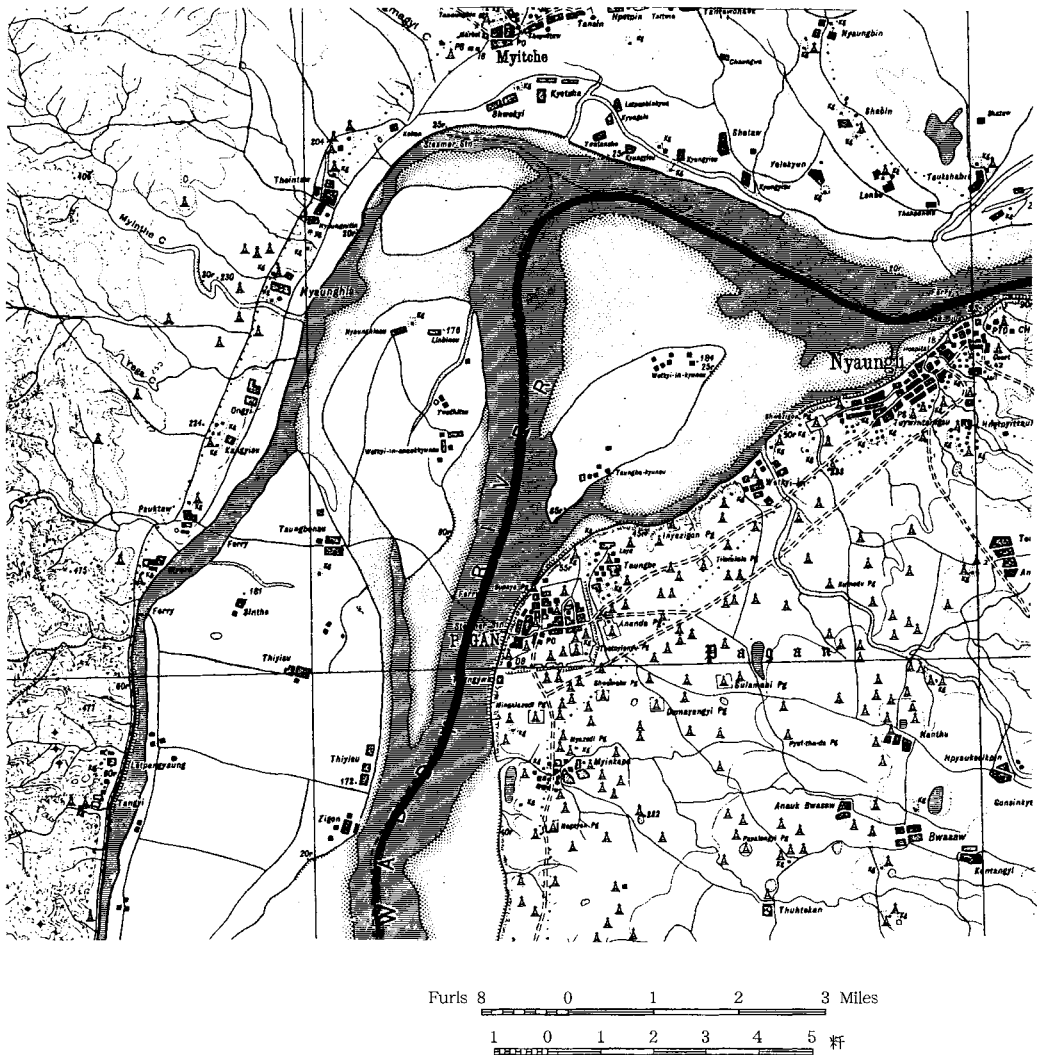
くの博物館に展示されている¹⁴⁾。

ジュリクシエトラはピュー王国最後の王都で、『蛮書』以前の記録としては、中国の年代記の中に802年に楽団を含むピューの使節団の一行が長安を訪問したとある。それを裏付けるように、パヤマ・パヤから5体のミュージシャンやダンサーのブロンズ像が発見されている¹⁵⁾。833年にピュー王国は滅亡し、

ピュー族も次第に衰退し、同化消滅していったと考えられる。

Ⅳ. パガンの王都

パガン王朝 (1044~1287) はビルマ族が建てた最初の統一王朝で、王都はエーヤワデー川の中流左岸にある。東から流れてきた



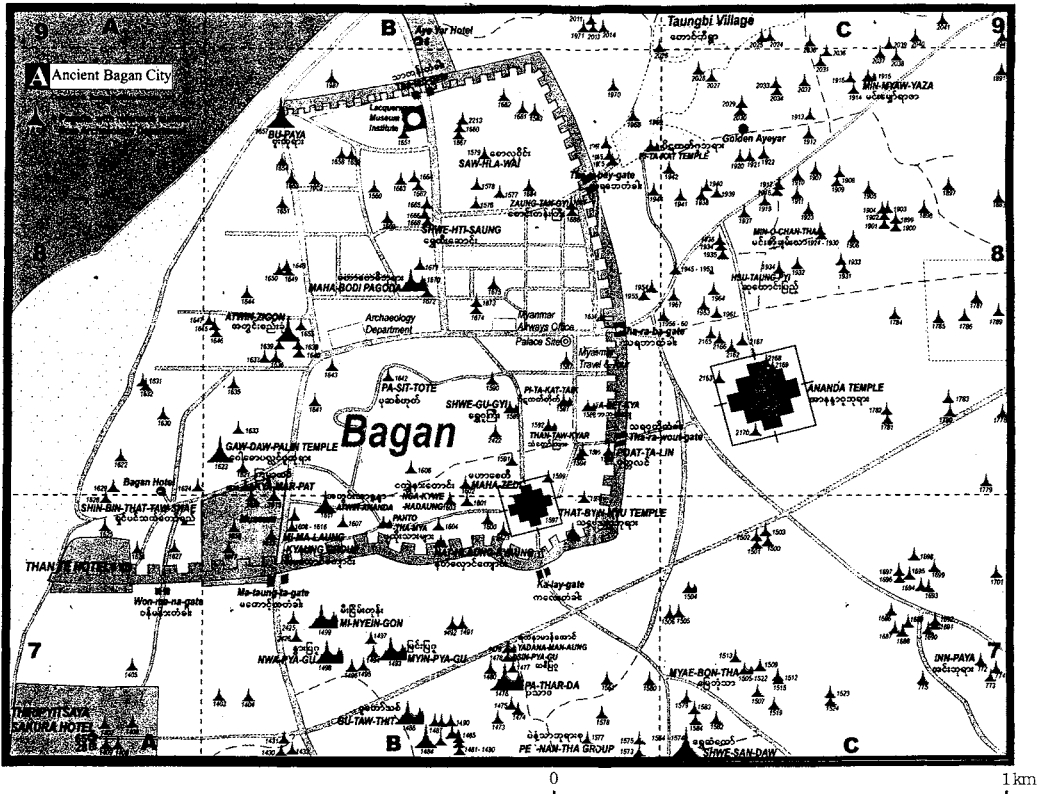
第6図 パガン周辺の地形図 (1942) 50000分の1
イギリス軍による測量をもとに日本軍が編集したもの (世界分布図センター・岐阜県情報工房所蔵)

川が流路を南へ変える岸边に立地している。エーヤワディー川は、東から西へ緩やかに傾斜した標高200 m 前後の平野の最低部を流れている。川の西側は標高1,000 m を越える南北方向の山脈が走り、その山すそを川が流れ、川の両側で非対称な地形を呈している（第6図）。11～13世紀には、バゴダや仏教寺院が数多く建てられた。オールドバガン（第7図）に王都が建設されたのは9世紀で、現在見られるようなバガンのおよその外郭を造ったといわれる。王宮は意外と小さな城壁で囲まれている（写真1）。第7図に示されているように、西壁と北壁の西半分が川の浸食で消滅している。北壁に1つ、東壁に3つ、南壁に



写真1 バガンの城壁
手前のため池がある
(1998年8月1日 辰己眞知子撮影)

3つの門が存在している。矩形の都市プランが残る道路や王宮の位置から、一見したところ中国の都城に似ている。宮殿は、東壁中央



第7図 オールドバガン（現地の観光マップによる）



写真2 タラパー門

東壁中央の門でこれが正門になっている。入口に男女のナツ神が祀ってある
(1998年8月1日 辰己眞知子撮影)

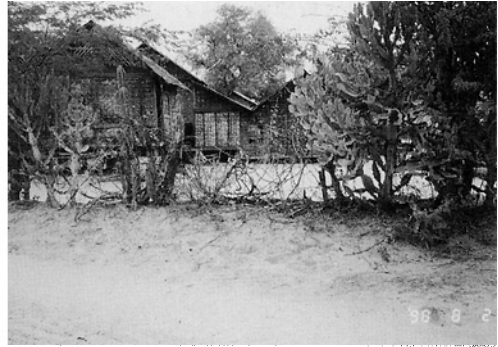


写真3 ドライゾーンの風景

バガン近郊ミンナンドゥー村の集落
トゲのあるサボテンや灌木で囲まれている
(1998年8月1日 辰己眞知子撮影)

の門であるタラパー門(写真2)から西へ130mのところにあった。中央よりかなり東に置かれているのは、東向きの構えであったと推測される。マンダレーの王宮もまた東向きに造られている。しかし、アンコールのバイヨンにみられたような須弥山的コスモロジーは、バガンでは顕著でない。都市プランに宇宙論を凝集するよりは、荘厳な風景の中で建塔という行為を示唆することで、南方上座部仏教の至高の境地を歴代の王権はめざしたと、野間は言及している¹⁶⁾。

バガンもまた、矮小な灌木やトゲのあるサボテン類しか見られない、年降水量750mm

のドライゾーンに立地している(写真3)。王朝の経済を支えたのは、150kmほど離れたエーヤワディー川支流に形成された扇状地の水利灌漑や、ため池灌漑、スリランカから導入した灌漑水路施設の石積技術などによる豊かな農業生産基盤¹⁷⁾に加えて、エーヤワディー川の水運を利用してインドや宋との交易¹⁸⁾であった。一方、陸路でも雲南の大理国と結ばれていたし、バガンから東へ進むとジャン高原へ最短で結ばれる。バガンは内陸の政治都市、宗教都市、さらに港市であった。

バガン王朝は1287年、フビライ=ハンの派遣した元の大軍の攻撃を受け、崩壊した。

第3表 ミャンマーにおける王権・囲郭都市の類型

遺跡名	時期	立地	形態	構成要素	造都の理念
ペイダノー	1世紀～5世紀	標高103～104mの平野、ドライゾーン	四角形	王宮、寺院 仏塔、墓地 池	インドや中央アジアの影響を受けている
ジュリクシェトラ	4世紀～9世紀	標高120mの平野	円形	王宮、仏塔	宇宙論(コスモロジー)が都市プランに強く反映
バガン	9世紀～13世紀	標高200mの平原、ドライゾーン	いびつな台形	王宮、幹線道路 仏塔、水路、寺院	コスモロジーの影響小

1277年の元軍との戦闘の様子や1287年のバガン城内に侵入した元軍の見聞などが、マルコ＝ポーロの『世界の記述』に記されている¹⁹⁾。

V. む す び

これまで取り上げられることの少なかったミャンマーの都城遺跡の中で、ピューの都市遺跡とバガンの王都を事例に、その立地や形態、さらに造都の理念について考察した。第3表は、その結果をまとめたものである。3つの遺跡に共通していることは、内陸の囲郭都市であること、仏教を篤く信仰していたことである。一方、時期がそれぞれ違うこと、ピューの都市遺跡は仏教に加えてヒンドゥー教の影響を強く受け、そのためコスモロジーが都市プランに反映しているが、ビルマ族の王都バガンでは、上座部仏教を篤く信仰し、コスモロジーの影響は顕著にはみられないことなどが判明した。

さらに、多くの都市遺跡との比較・検討することが望まれること、東南アジアだけでなく、日本を含めた東アジアからインドに至る地域の都市遺跡を比較・検討し、類型化すること、そして、都市プランや造都の理念の源流を探ることなどが今後の課題である。

〔付記〕小稿の内容の一部は1999年立命館地理学会で口頭発表したものである。奈良女子大学院生の中西和子さん、世界分布図センター・岐阜県情報工房の諸先生には、資料や地形図入手の際、お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

注

1) ①辰己眞知子「ミャンマーの都城—バガンを例として—」、(『ミャンマーの人と風土—ヤン

ゴン・バガン・シャン高原—』、野外歴史地理学研究会、1998、所収)、14~15頁。②辰己眞知子「ミャンマー—豊かさとは何か—」、地理44-1、1999、75~81頁。③辰己眞知子「ミャンマーの忘れえぬ人々」、地理45-3、2000、14~17頁。

2) リチャード・ティラー・フェル著、西村幸夫監修、安藤徹哉訳『古地図にみる東南アジア』、学芸出版社、1993、107頁。

3) 牧野 昇・三菱総合研究所『全予測アジア1995』、ダイヤモンド社、1994、238頁。

4) 奥平龍二「歴史的背景」、(綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいミャンマー 第2版』、弘文堂、1994、所収)、19頁。

5) 前掲 4)、6頁。

6) 長澤和俊『バゴダの国へ ビルマ紀行 (NHK ブックス235)』、日本放送協会、1975、226~227頁。

7) 前掲 4)、7頁。

8) 森本 晋「ミャンマーの都市遺跡」、考古学研究46-1、1999、32頁。

9) 前掲 6)、217~221頁。

10) Aung Thaw.: SRIKSHETRA (THAYEK-HITTAYA): *Historical Sites in Burma*, The Ministry of Union Culture Government of the Union of Burma, 1972, pp. 16~17.

11) 岡 千曲「都城の宇宙論的構造—インド・東南アジア・中国の都城—」、(上田正昭編『都城』、社会思想社、1976、所収)、348~350頁。

12) 前掲11)、349~350頁。千原によると、「須弥山をかたどった王宮の王は32の封臣に護られて鎮座するインドラ神を王とする宇宙論にむすびつく。」と述べている。千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』、鹿島出版会、32~33頁。

13) 前掲 8)、31頁。

14) 前掲 6)、226頁。

15) 前掲10)、31頁。

16) 野間晴雄「王権とその背城—東南アジア港市論と水利都市論の拡がりをめぐって—」、歴史地理学41-1、1999、54頁。

17) 野間晴雄「ミャンマーの歴史地理像—人口希少な複合社会のジレンマ—」、地理42-3、1997、37頁。

18) この点について、中国史料には宋都開封に早くも景德元年(1004)、蒲甘国(バガン朝)が入貢したとの記載を千原は指摘している。前掲12)の千原論文181頁。

19) 愛宕松男訳『マルコ・ポーロの旅 東方見聞録 1』、平凡社、1983、256~261頁。